

二章 藏前時代

空中窒素固定

私はドイツ留学の帰国土産として、空中窒素の固定と、日本全土に於ける岩塩の搜索と、朝鮮にバラを栽培して香料を製造することの三つを提唱した。空中窒素を固定することは、未だ日本では文字通り黎明期の仕事であつた。

その時分、藏前高等工業の商議員の一人に村田一郎と云う人が居つた。当時たしか富士製紙の社長で、私とは一面識もないのであつたが、或る人の紹介で新橋駅で面会したいのと、私には誠に唐突な申出であつたが、学校の商議員の方であるから直ちに停車場に行き面会したところが、今から一緒に横浜に行き、そこで空中窒素の話をして貰い度いとの注文である。私は横浜の何処で誰に話をするのか別に詮議もせず、只窒素問題に満足して唯々諾諾と村田さんに従つて横浜へ行つた。

横浜の社交クラブに連れて来られた私は、そこで昼飯の御馳走になった。このクラブは横浜の実業家の集会所となっていたもので、現在平和球場のある、当時は横浜公園と呼ばれた処にあつた。昼食の後で、かねて準備がしてあつたものとみえ、以後懇意な間柄になつた、原富太郎、中村房次郎、茂木惣兵衛、渡辺文七、大浜忠三郎、石川徳右衛門、若尾幾三、と云う様な浜財界のお歴々が居られ、土子金四郎と云う法学博士が座長の様な格をしていられたのであつたが、この人達と囲んで私は依頼に応じ空中窒素固定の話をした。この土子博士は、有吉、井坂両氏が横浜に来られる以前、横浜の実業家を操縦して居た第一人者で、保険会社の社長であつた。後の保険界の重鎮、吉井桃磨君は土子さんの秘書のような役をつとめていたのである。

私の空中窒素に就ての話を聴いたその人達の中で、若尾氏は質問し、「空中の窒素をとれば、それだけ空気中の窒素が少なくなる、そのために人類の生活に影響するではないか。」と執拗に私に喰い下つた。私は大気中の空気は一哩平方の上だけでも、これだけあると数字を挙げて説明し、それだけでも非常な大量であるから、その中から窒素を採つても実に些細なもので問題にならないことを説いたのであるが、如何に少量でも取ればそれだけ減ると

て、若尾さんは容易に聞き入れない。遂に私は窒素の循環説を持ち出したところ、やつと若尾さんも「その自然原理で安心しました」と云われたことを、今も記憶している。若尾さんの此の質問は一かどの卓見があるので、同氏の人柄の一端を示し私を敬服せしめた。土子さんが其後も此の問題の中心人物で、時には原さんや中村さんに向い、君等は箒で他人の足下にある錢を自分の足下にはき寄せることを知つて居るのみである。空中窒素事業は殆んど無より有を生産する事業であると無遠慮を飛ばす間柄であつた。

その後、土子さんを世話役とし、吉井さんが實際上の事務を取扱うということで、横浜に窒素工業の組合が出来、私も学校の傍らその事業に専ら関係した。

その頃、東京の農商務省の工業試験所に、今津明と云う若い技術者が居り、それを或る縁故から私の相棒として窒素問題を研究した。丁度その時分、ノールウエーに『ノールウエーアン智利硝石』の名で一つの発明があつた。そこでこれを研究するため、横浜組合は今津君を欧州に派遣することにした。今津君は欧州に出かけて研究している間に、それよりも有利な、フランスのセルベック法のあることを知つたので、その方の研究に転換したとの報告をよくした。このアルミニウム・ナイトライド。即ちセルベック法というのは、アルミニウ

ームの化合物に、例えばボーキサイトの様なものに空中窒素を固定し、これを分解して一方アンモニヤを造り、その残滓から金属アルミニウムを精練する方法である。今津君の報告を見て、組合の大將である土子さんは大いに怒つて、「今津にはセルベック法の研究を委任したのではない、独断で転換したなどとは不屈至極である。早速今津を呼び戻せ。」と、至急帰国の敝命を出した。今津君がヨーロッパを発つて、シベリヤ鉄道で帰朝の途上にあつた頃、確か浅野であつたと思うが、印度でボーキサイトの鉱区を買収した、との噂が出た。そこで土子さんは、これは必定セルベック法をやるのであらうという疑問を起し、今津君が帰着するや否や、協議した結果はセルベック法に鞍替えして、今津君を再度ヨーロッパに派遣することに決定した。ところで今度は、今津君を一人でやるのは危険千万であると考え、誰か組合の人が同行するということで、原さん、中村さんにも相談したが、夫々故障があつて行くことが困難なところから、最後は私にその使命が廻つて来た。それで私は、一時蔵前の教授を休職にして貰い、今津君に遅くれること一カ月足らず即ち大正二年三月上旬欧州へ向つた。その間、先行の今津君は、セルベック法について特許買収の下相談に當つていた。私が高橋を発つ時、友人の深井英五君（後の日銀総裁）が送つて来て、「自分は日露戦争の

時、高橋是清さんに従つてフランスに行き、公債の募集をしたが、話がまとまつて、いざ調印という時になつたら、その金はフランスに留め置いて軍需品を買え、と云う条件を出された。君もフランスで特許買収の談判をするには十分氣をつけるがよい。」と、私に注意を与えてくれた。私がバリに着いて、セルペック法に関し、向うの会社の重役と凡ての条件を整え、いざサインをしようという段になると、果して先方は一条件を出して来た。それは契約条件中に、一キロワットの電力に対して何グラムの窒素を固定する、という条項があつたのであるが、その窒素の量が一デシでも足りなかつた時はどうするか、と云うので契約条項の修正を求めた。私は勿論「契約の通りである」と答えたのであるが、相手はそれを甚だ苛酷だとして談判は容易に纏らない。私は出発当時に深井君から受けた注意を思い出し、「ここじやな」と思つて頑張り、最早や談判は破裂だとして、同行の通訳や今津君等を促し、机上の書類を鞆に納め將に立去らうと仕度を始めたところ、やつと先方は折れて契約にサインを終えたのであつた。

私はこれで一安心し、バッグを去つて私の根拠地であり休養地であるドイツのハノーバーに歸つて滞在した。滞在中に、かつての先生であつたボーデンスティン教授を訪ねたところ、

「君は窒素問題で来たとのことだが、私はセルベツク法は、さ程信用しない。それよりもハーバー教授に信を置いている。当のハーバー教授は数日後、ベルリンの化学会で空中窒素問題に就いて初めて公開発表をすることになっているので自分も傍聴するつもりであるが、君も同行してはどうか。」と、誘われた。そこで私はベルリン行を決心し、先生と同行しようと思つていたが、ボーデンスタイン先生は差支えが出来たため、私は一人で行くこととなつた。

ハーバー教授は、その頃南独のカールス・ルーエからベルリンのカイザー・ウィルヘルム・インスチテュートの所長として転任されて居り、永年ハーバー教授の助手をして居る田丸節郎君も矢張りカールス・ルーエからベルリンに来ていたので、私は田丸君を訪問し、その夜ハーバー教授の講演を聴いた。

講演の際、水素と窒素の合成の実験をして見せ、その間、田丸君はハーバー教授の傍について凡ての実験を司つたのである。合成によつて出たアンモニアを液体炭酸ガスで採り、場内に散じて匂を嗅がせた。特有の臭気を鼻にした会場の者は思わず一斉に喝采した。講演が終ると、会長は、「これは世界的の発明である」と賞讃の辭を呈し、大喝采の中に講演会は

終了したのであつた。

それから再び私はハノーバーに歸つた。ハノーバーは先年留学した時、二年間を過した親しみ深い都会で、私は何処よりも落着けるのである。ところが或る日、横浜から長文の電報を受けたのであつた。その趣旨は、東京で最近、渋沢子爵を中心として、三井、三菱、住友、石川、田中、三共等が集り、空中窒素工業を企て、三共の高峯讓吉博士を代表者とし、浅野の技師長である近藤会次郎氏を付添いとして、何月何日ドイツに向つて出発するといふのである。これには私も少なからず驚いた。高峯博士一行がヨーロッパに来るからには、必ずハノーバープロセスを目標としているに違ひない。そのためには、先ず田丸君を直指してゐるのは必然であると思つた。これはどうしても私が先鞭をつけねばならぬと考え、電報を受けるや否や私はベルリンに向つて出発し、直ちに田丸君を訪ねてハノーバー教授に面会が出来る様その斡旋を依頼した。ところが、ハノーバー教授夫妻は、その時チエツコスロバキヤのカールスバードと云う温泉地に避暑中で、ベルリンには居られない由を聞いたのである。そこで私は事情を話し、カールスバードへ行つて是非ハノーバー教授に面会したいから、「君も同行してくれ」と誘い出し、共にカールスバードへ出かけて、教授夫妻が泊つてゐるホテルに

同宿した。数日間の滞在中に、横浜の事情を詳しく話して、ハーバープロセスの特許を買い
たい旨を訴えた。教授は快く承諾され、特許はマンハイムにあるバジツシユアニリンソーダ
ーフアブリックが持つているから、そこへ紹介しようということで、私はその会社に行き相
談することに決めたのである。尚その際に「私は一介の書生であつて、この様な仕事には至
つて不慣れであるから、教授が適当と思われる人を紹介して、私につけていただきたい。」
と依頼したところ、ハーバー教授はドイツの実業界で相当知名な、ヘリツクス・カールマン
と云う人を紹介し、教授から頼んで貰つて、その快諾を得た。しかしその人は、当時ベルギ
ーのオストエンドという海水浴場に避暑中であつたので、私は田丸君を同道して、オストエ
ンドへ面会に行くべく、カールスバードを出発することにした。

もうその頃は、高峯博士の一行はベルリンに到着している時期であつたので、ベルリンを
通つてオストエンドに向えば高峯博士に逢う機会が必ず出て来るものと考えられ、これは甚
だ都合の悪いことだと思つた。それで私はベルリンを避け、南独を通つてオストエンドへ行
くことを主張した。南ドイツのスツツガールは私の未見の都会であり、これを是非見て行き
たい、と云うのが私の表向きの理由であつた。田丸君はベルリン通過が順路でもあり、又オ

ストエンドは、豪華な海水浴場で従つて社交場でもあるから、面会のためには、礼服と礼帽を携帯したいとて、ベルリン通過を強調するのであつた。私は自説を固持したが遂に田丸君の説に従つて危険ながらベルリンを通ることに決心した。ベルリンに着くや直ちに田丸君と別れ、私は更に西方約六十里を隔つたハノーバーに一泊することとし、私のアドレスは、わざと知らせずに、ただ田丸君には翌日午前何時にハノーバーを通過の際、そこで落合うこと、及びオストエンドでカールマン氏に面会のことなどの再確認をして置いた。

後で聞くと、高峯博士一行はベルリンに着くと、先ず第一に田丸君の宿所を訪ねた由、宿所ではカールスバードを間違えて、田丸君がベルリンに来るまでハーバー教授と共に居つたカールス・ルーエへ行つてゐると伝えたので、高峯氏一行はカールス・ルーエに、その所在を糺したが、そこには居ないことがわかり、仕方なくベルリンで、田丸君が帰るのを待つていたということである。高峯氏一行に会つて様子を聞くと、何さま、田丸君は既にカールマン氏と面会を約している。そこで田丸君は、話しをそこそこにして別れ、約束通り私と同行してオストエンドに向つたのであつた。

此処でヘリツクス・カールマン氏に面会し、バジュシユ・アニリンソーダ会社へは、カー

ルマン氏を同道して行く旨を通じたのであるが、会社側は「カールマンの同行は困る。あなた達二人のみで来てくれ」と要望したので、余儀なく二人でマンハイムへ行つた。会社では、ベルントーゼント、ミュラーの両重役が応接してくれたが、先方の申し分によると、ハーバープロセスは原価計算に於て未だ充分とは云えないので、今屢くパテントの譲渡の相談は待つて貰い度い。尚、このプロセスでは、機械工業が可なり重大な役目を果すものであるが、日本の機械工業が修理其の他をなし得るであろうか、との話であつた。私の方でも自信を持つて答えることは出来なかつたので、先方では一台をスペアとして、都合二台購入する必要があるとまで述べられた。

一応の談判が終るに當つて、私は会社に対し他からの特許譲り渡し交渉には一切応じない様にして貰いたいと頼み、これに関し一札の書面を頂きたいと請求したところ、書面は出さないが紳士協約として承知したということであつた。

これで自分の仕事が付いたので、田丸君とカールスルーエやライプチヒを見物して、ベルリンへ歸つた。一方高峯博士は我々の留守中パリのセルベック法や独逸のハーバー法に交渉をせられたが手遅れであつたため非常に困つたらしく、私に直接、間接、高峯博士方と合

同の話を持ち出されたが折合わなかつた。私はハノーバー市に滞在して計画を進めていたのであるが、今津君はパリに居つたため自然高峯博士と面会したらしい。高峯氏からは頻りに私のパリ行を要請せられて来た。それでも私は承知しなかつた。パリに行き博士に面会する以上は合同を覚悟しなければならないからである。高峯博士は我々の大先輩のみならず世界的の名士である。博士の要請でパリまで行くとすれば、合同の覚悟を以てしなければならぬ。合同すれば私に去つて博士の独裁に任せなければならない。空中窒素事業は国家的の事業である。此の覚悟なくしては私のパリ行は全く無意味の事であると私は慎重、熟考して条件次第で合同すると云う覚悟を以て独逸を出発してパリへ向つた。

高峯博士は米国人の夫人と共に、シャンゼリゼーに程近い、ホテル・マゼスチックと云うパリ一流の宿に滞在していた。私もそこに同宿して数日間を過し、その間に高峯夫妻からホテル滞在客の種類や様子を教えられ、パリの観光客について多分の新知識を得たのであつた。こうして滞在している間に、窒素問題は検討されて遂に一致点に達し、契約書を作つてサインしたのであつたが、契約条項の多くは、私の提唱したものを殆んどその儘異議なく高峯博士が容れてくれたものであつた。しかし契約にサインしたとは云え、私は横浜に帰り

組合の承認を得ないと有効とは出来ないのであるが、博士の方は如何であるかと念を押したら、高峯博士は自分のサインだけで東京の承認を得る必要はない、と確言せられ、この問題は一応の終結を見た。その日は、共に撮影し共に夕食をとつて、契約の成立を祝し合つたのである。

それでもう私の仕事は万事果したのみならず、私は奎素問題から退くべきであると覚悟したので、即日バリを引上げてドイツに帰り直ちにシベリヤ經由で帰国する旨を今津君等に告げた。彼等は今暫くバリに滞在して、ゆつくり各地を観光すべきであると勧めてくれたが、私はその様な気分になれないまま即刻バリを引上げハノーバーに帰り、すぐにドイツを發つて、途中セントペテルスブルグ、現在のレニングラードを見物しただけで、十月の上旬無事に帰朝した。

横浜に歸つて契約書を見せたところ、異議なく承認せられた。ところが東京側は容易にこれを承認せずして、石川、田中、大川、浅野の人達が、一夕茅場町の或る料亭に私を招き、契約条項の諸点を挙げて、「これは余りにも横浜方に有利に過ぎる」と、その一方的であることを指摘し変更を求めたのであつたが、私は頑として一点一劃の変更をも承知しなかつ

た。それから私は、渋沢子爵に連絡し、窒素問題につき申し上げたいことがあるから、僅かの時間を割いて下さる様依頼し、子爵邸を訪問した。そこで私と高峯博士が、契約にサインするまでの経過を述べ、東京側がその契約を履行しないという苦情を訴えた。しかし子爵に對し、組合長の資格と責任に於て、その契約を承認してくれと云うのではなかつた。私は子爵を我国実業界の大御所として敬意を表しているし、特に子爵の唱えていられるポケット論語の愛読者でもある。その崇拜者の傘下に、契約を結びながら履行せず、これを反古にするという連中のあることを筋を通して説明した。このことは「ただ子爵の御裁量にまかせるのみで、御決定、或いは御返事を待つというのではない。」旨を告げて邸を辭し、これを横浜に歸つて報告した。

かくこれしている中に、欧州の風雲は急となり、遂に翌年七月、世界第一次大戦が勃発し、この問題は収拾できなくなつた。この間に日本政府は、敵国であるドイツのハノーバープロセスの特許を没収して政府のものとし、その特許の使用を前述の両組合に許可した。高峯博士は、その時まだ欧州に滞在中であつたので、田丸君を伴つてアメリカに渡り、ハーバード法の実施について種々研究をしたが実行に至らず、特許権は握つたものの、以上両組合の

何れの側も、又合同しても実行の見透しのなき儘戦争は終結した。

戦後、ドイツからハーバー法によつて製造された硫安が、多量に日本に輸入せられるようになつてから、東京と横浜の連中は合併して東洋窒素株式会社なる名義の会社をつくり、我々はこの特許権を持つてゐるのだから、これによつて製造される硫安を日本に輸入するについては、『一トンにつき何円』、のローヤリティーを払えと申出て、この窒素会社は何ら製造せずして利益をあげた。これがために世間から非難もされた。横浜側はその株を満鉄に譲り渡し、この問題から全く手を引いた。此の窒素問題が根源となつて、思わぬ所に芽を吹き出したのが、富山県魚津に於ける日本カーバイド工業株式会社で、創立者は卓見なる奥村政雄氏である。

甜 菜 糖

私は窒素問題でドイツに滞在中、日本から来る新聞を見て、東北地方の冷害と、そのために起る不作から餓死者を出したと云う悲惨な状況を知った。農業の改革はあるにしても、兎に角東北及び北海道の冷害は不可避の一つの天災であり、余りにもこの地方で米作に執着することは危険なことである。欧州に於ては、ドイツを初めロシアのような寒い国でも甜菜を栽培して製糖を行つている。これは大いに研究すべきことで、私が北独のハノーバーに留学の砌り製糖工場を見学し、既にその時気付いたことであつた。今回の再遊に際し、東北地方の冷害を知るに及んで、甜菜に関するこの記憶を呼び起したのである。

蔵前の学校に帰り、再び教授として勤務した私は、是非この研究をしたいと思つた。そこで私の最も懇意な知人である横浜の中村房次郎氏に支援を求め、当時蔵前高工の応用化学科

の助教授、野田市三郎君を伴つて、東北と北海道の視察に出かけた。

甜菜糖工業は、私が始めて着目し着手したものではない。既に明治十年に時の元老、松方正義公がバリの万国博覧会で、砂糖大根（甜菜）から製造せられた砂糖の出品を見て来られ、丁度その頃、北海道は開拓使を置き開拓に身を入れていた時代のこととて、早速資本金十萬円の半官半私 of 精糖会社を、札幌郊外の苗穂という所に設立せられたのである。しかし、これは四、五年にして、即ち明治十四・五年頃に不成功のままに解散してしまつた。その理由は、「北海道の土地は、甜菜糖業を起すには不可抗力的要素がある。」とし、爾來四十年以上その儘、不間に附せられて居つたのである。それで私は視察に当り、北海道庁を訪ね甜菜問題には一切触れずに、只札幌近傍に現在居住する老農の所在と姓名を聞き出し、野田君と共に近郷の村に入つては老農を訪ねて、当時の甜菜栽培のことを質問し、色々有益な過去の出来事を知り得たのである。それによると、当時甜菜の栽培は初めてのことであるから、栽培者に対しては一反歩に何円という保護金を与えることとし、甜菜が芽生え出た時に検査したのであつたが、蕪やその他の種を蒔いて甜菜であると欺き、保護金を丸取りする百姓があつても、それを鑑別する経験も知識もなかつた。又収穫した甜菜を工場外で受取り其

の場所で秤量したため、一度秤量したものを道を迂回して再び秤量場に行き、秤量してもらうから百貫のものが二倍即ち二百貫となつて納められるような例もあり、この様な不正が色々な点で行われたと云うのであつた。尚、その頃に製糖技術を担当していた人が、現在製麻会社に勤務していることをつきとめたので、製麻会社を尋ねて行きその技師に会つて当時の様子を聞くことが出来た。その話によると、欧州に於ける甜菜糖の製法は其の時分にプレス法から滲出法に転じ、甜菜製糖の劃期的な変遷時代であつたが、北海道では、その廃棄されたプレスの機械を購入して使用したので、精糖に大なる費用を要した。又脱色に骨灰を使用したため、製品は不淨で仏事には使用できないとの風評が流れ販売上にも大きい支障を来したと云うことであつた。

私はこの様に栽培上、製造技術上、世に知られない数々の問題を発見したのである。次に天候の状態を欧州に於ける甜菜産地と比較してみると、天気日数は東北、北海道と殆んど変わらない。雨量はこちらが確かに多いが、それは雨天の日の雨量が欧州より多いというだけで、日照日数に差のないことから、日本に於ても甜菜糖業は必ず成功するとの結論を得たのである。のみならず砂糖を採つた残滓は乳牛の貴重な飼料となり、又これは一つの機械工業

であるから、工業を発達させる動機を作るものである。それ故に甜菜工業の発達、農業・牧畜・工業の三者を併せ発展せしめる要素であると考えた。私はその記録を、当時博文館から発行していた最も有力な雑誌である『太陽』に二号に亘つて連載し、尚一冊のパンフレットとして、製糖会社の幹部や、東北、北海道の知人並びに有力者に配布した。ところが其の後、間もなく台湾製糖の社長、松方五郎氏と専務の牧山清砂氏が、帝国ホテルに私を招き、種々これについて協議質問せられた。又、宮城県知事で後に憲政会の総裁になつた、俵孫一氏から懇篤な書面を貰い、宮城県の農事試験場では、甜菜を試作し二カ年に渡つて、蔵前高工に其の試作品を送つて来たので、学校ではその甜菜を毎年検査したことがあつたが、その後はどうなつたか詳かにしない。台湾製糖の方は、どういう経緯を経たものか、兎に角帯広に甜菜糖工場を設けて製造を始めたのである。昭和十年、私が教育界から退き、北海道を視察して帯広に行つた際、その工場を訪ねたが、少し時期が早かつたため未だ工場は運転してゐなかつた。しかし帯広から余り遠くない清水という所の明治製糖の甜菜糖工場が既に製造を始めていたので視察して、工場長とも面会した。話が甜菜糖工業の由来に及んだ時、工場長は雑誌『太陽』に掲載した記事を見たいと云うので、私は帰宅後これを送つたことがあつ

た。

その後、幾年か経つて私が横浜に居つた時分に、牧山清砂氏の逝去を新聞広告で知つたので、用事の隙を見出し、青山斎場に焼香して立去ろうとした際に挨拶者の列中から一人の紳士が私の後を追つて、「あなたは鈴木さんではありませんか、牧山が生前には、あなたに会社の囑託か顧問に是非なつていただきたいともらして居りましたが、遂に実現できずして死にました。」と云われた。私は牧山さんの厚意を喜び一言の礼を述べ、その紳士の名も聞かず其のまま別れたのであつた。これが私の甜菜糖に關しての終結である。

塩の専売廃止論

塩が専売になつたため、化学工業に色々な不便が生じた。塩は化学工業にとつて重要な原料である。そこで私は専売局長の目賀田種太郎さんを訪ね、何故塩を専売にしたのかと質した。局長の答は、日清戦争後、支那の塩が多量に日本へ輸入せられ、瀬戸内八州塩田が圧迫をうけて製塩業者は窮迫の結果、塩の専売を請願した。政府も財政窮迫の折柄、専売による利益を考えて早速これに応じた。とのことである。そこで私は海軍省に出向いて、一朝事ある時にも支那の塩を輸入するに對馬海峡を安全に保護し得るや否やを質し、そして、その安全なるを知り一先ず安心した。

そこで私は塩の専売廃止論を唱え、塩を原料とする化学工業を列举して専売のために如何に多大の不利益を蒙るかを説明し、他面に於いて塩専売により政府が獲得する利益は、他に

求めて余りあることを力説した。その財原の一つはマツチの課税である。その理由として、警視庁でマツチを原因とする火災を調べ上げ、これに課税すべきであるとした。次に地租も所得税と同様に累進的に賦課し、一定の広さ以上の土地所有者に対しては、返つて損失になるよう課すのである。これによれば自作農は保護せられ、土地を愛し、極端な所謂不在地主は絶滅することが出来るとした。第三に酒類の増税を説いた。この三者の実施は塩専売から得る利益を遙かに超えることを論じ、雑誌『太陽』に掲載して専売局に挑戦した。色々な手を尽して執拗に活動したが、専売局では余りとり上げなかつた。聞くところによると、専売局の一部では、鈴木と云う奴は厄介至極で煩しいから、その儘そつとして置くがよい。との意向であつたらしかつた。

朝鮮電気工業株式会社の設立

東洋拓殖会社が定款を改訂し、農業のみならず工業にも手を出すこととなつた。私の友人で会社の理事である川上常郎氏から、何かよい事業はないかとの相談を受けた。私は二、三の新事業を提供したのであつたが、その一つは平壤から生産する無煙炭を使用して発電事業を起し、丁度その頃発展の徴候があつた鎮南浦を始め、最後には京城まで電力を供給する案であつた。

理事は氏の案に賛成し、これを計画することとなつた。

私は予て満鉄の撫順におけるモンドガスの製産に関心を持っていたので、平壤の石炭が塊炭でなく粉炭であり無煙炭であることから、ガス発生には不適であることを知っていた。そこでこれに撫順炭を混ぜてモンドガス発生を計画したのであつた。朝鮮総督府を説得するに

は平壤石炭を利用すると云うことが第一義であると考えたのである。東洋拓殖会社は、この計画を総督府に申し出てその許可を仰いだ。総督府は京城の工業試験場に可否を諮問したところ、不可であるとの答申があつたので許可しない。東洋拓殖では困つて、私に朝鮮への出張を懇請したのである。私は早速出かけて京城ホテルに宿泊したのであるが、私が来鮮したことを新聞で知つた工業試験場技師の古城鴻一君と他の一名の知人がホテルに訪ねて来て、私が朝鮮に來た目的を質問するのである。その理由を聞いた兩人は、「あの企業に先生も関係があるのか。」と云うから、「私はその発案者である。君達は朝鮮界限まで来て、いたずらに試験管やビーカーばかりいじつてるのが芸ではなからう。東洋拓殖の大きい資本を利用して大事業を企てる気分がないのか。」と、大風呂敷を拡げて談じた。それから数日後、東拓の肝入りで、総督府側とこれについての会議が催され、私が説明に當つた。総督府からは、工業試験場の技師達を始め、これに關係のある吏員が列席した。私の説明が一応終つたところで、総督府の大臣格の人から、不審の廉があれば質問せよと云う段になつたが、古城君からも列席の人達からも、何の質問もなく「よく解つた。」と云うことで會議は終り、東洋拓殖は大いに喜んでくれた。

それで東拓は早速、撫順に交渉したが、撫順側では、朝鮮の鉄道が使用する石炭は全部こちらが供給しているのもそれ以上は応じられないと断つて来た。そこで平壤の無煙炭を鉄道に使用する方途を講じた。平壤炭は粉炭のため、煉炭にする計画を立て、当時朝鮮米を精白するのに多量の糠が出ることに注目し、これに僅かの石灰を混じて粘着剤とし、粉末の無煙炭をこれで練つて、煉炭を製し、汽車に使用した。ところが思わぬ困難に出合った。と云うのは多量のクリンカーが出来て始末に困つたのである。

一方では、煉炭の成績如何に拘らず、とにかく撫順炭と平壤炭でモンドガス製造の可能ありや否やを研究する必要があつた。確かその当時、撫順にはモンドガス製造に五基の炉があつたので、その一基を借りて試験したいと交渉したが容易に成り立たない。そこで再度私に出張を懇請して来た。余儀なく朝鮮に渡つた私は、用件を詳しく聞いて川上理事を伴い撫順へ行つた。それは確か一月で寒い絶頂であつたと記憶しているが、その晩モンドガス関係の連中を一料亭に招待して交渉したのであつた。相手方の幹部や技術者中には蔵前の出身者が多く居たので、話は容易に纏り一基を借り受けることとなり、朝鮮から幾百屯の平壤炭を送つて試験することが出来た。しかし煉炭の方はクリンカーの始末が出来ないままであり、モ

ンドガスも思わしい成果が上らず、最後には東拓の他の技術者の手で、粉炭を噴霧状にして炉に吹込み、発電することとなった。遂には私が連れ込んだ技師グループと重役の間に、面倒な紛擾を生じ、その後どの様になつたか詳にしない。私は発案者として又その進行中、只依頼に依じて助成したのみであつたから、朝鮮電気工業会社の終末を知らないのである。資本金は一千万円であり、東拓が半分を持つて居た筈で、横浜の人の中にも、この会社の株を持つていた者もあつたと思う。

この様な關係から、私は横浜にモンドガスでない方法で、大工業の動力源としてガスを使用する案を立てた。これには、中村房次郎氏も賛成し、着々その計画を進めたが、使用する石炭は樺太産のものであることが技術上の条件であつたため、これには中村さんは不同意で、遂に計画を中止した。樺太の石炭を使用することは、政党その他政治上の關係が甚だ煩しく、ことによると疑獄を生ずる怖れもあると云うのが、中村さんの不同意の理由であつた。中村さんという人は、そう云う点で全く清浄潔白であり、私は感動し快くこの計画は断念した。

その他、私は横浜港に一大冷凍倉庫を設ける計画を述べて、函館まで出張し、同地の冷凍

倉庫を視察したことがあつたが、この企業も発展せしむることが出来なかつた。

蒙古天然曹達の探険

第一次世界大戦中、色々な化学薬品が欠乏した。その頃東蒙古に天然曹達の露出している処があり、その採取権は蒙古王が持つて居るので、何らかの方法を講ずればこれを獲得することは出来るであろうと、朝鮮の或る人が、三溪原富太郎先生に話を持ち出した。そこで三溪先生は、その様子を知らうとして、適当な探険家を求めていられることを知った私は、原さんに面会し、自分がその事に当りたい旨を申出て、私の蒙古行は決定した。

原さんは、その当時満州や東蒙古には馬賊の出没が頻々とあることを頗る心配されて、経費は幾らでも出すから危険を避けることには最善を尽してくれとの注意を与えてくれた。

大正四年十月、私は単身東京を発ち満州に向つて出発した。大連に到着するや、蔵前の出身者で満鉄に勤めている連中に私の目的を密かに話して同行者を募つた。当時、蔵前を出て

満州に勤務している者は、可なり多かつたのであるが、その唯一の条件は家を持たない独身者であると云うことであつた。かくして求め得た同行者は、藏前の応用化学科の出身で私の教え子である秦守君という青年ただ一人であつた。内密の中に、大連で用意を整え、先ず奉天へ私が先発し、秦君が一日遅く来て来るのを待つたのである。秦君の遅くれた理由は、死後に形見として残す品々や所持金の整理のために、遺書も認めたとのことであり、聞いてお互に苦笑した。残りの仕度は奉天で整え、時計、眼鏡等、すべて鉄製の安物を用い、所持品も高価なものはいらず、護身用の品物は一切携帯しなかつた。時は十一月であつたから専ら防寒の準備はせねばならない。即ち苦力の使用する毛皮等を購入し、愈々東蒙古に入るため奉天を發つて出発点である四平街に向つた。この地で一泊の上、更に馬車その他必要なものを整えて、朝の三時頃そこを進発したのであつた。

一行は陸軍の世話で得た通訳を含めて五台の馬車を連れ、西の方鄭家屯に向つたのである。二人の通訳は何れもハルピンで記念碑となつた志士、沖、横川の一味であつたので途中色々な冒險逸話を聞いた。砂漠の中を行く駱駝隊も、かくやと偲ばれ、一種凄愴な感じに打たれたことの記録は今も尚新しい。満州の高梁は刈り取られた後で道路というものは殆んど

ない。收穫の終つた高粱畑の中を進むのである。馬車は四角な箱を車に乗せたような、例の満州特有のものであり、その上、凹凸の激しいこととて箱の天井に頭を打ちつける危険が多分にあつた。私共は時々苦しさの余り、歩行し得る様な場所では車を捨てて歩いた。二頭立ての馬車ではあるが、道がわるいので進行は遅々たるものであつた。今日では四平街と鄭家屯の間は汽車も通じ容易に往来し得るが、その頃の雨期には五日間を要したと云われ、私達は中一泊で鄭家屯に到着したのである。此処の日本人は確か二人の売春婦が居たのみで、彼等が此処へ来た困難な話など聞いたものであつた。鄭家屯で麻の袋を買求めて中に牧草を詰め込み、馬車の箱の三方に吊し、その間に軀をうずめて馬車が動揺しても天井で頭を打たぬ工夫などした。又予て奉天で張作霖に依頼してあつた護衛の騎兵が二名、此処から加つたのと、未だ二十才に満たない青年であつたが道案内を一人雇つたので、鄭家屯を出発する我々一行の総勢は十三名となつた。そして更に西の方、興安嶺の方向に天然曹達の露出を求めて進んだのである。ポリと云うところへ来ると、そこは沼地で夏分には極く浅い水を湛えていたらしい形跡があり、寒くなつて水が無くなると、溶けていた曹達が霜を置いたように露出し、そして此処には一カ所曹達の精製所があつた。原料は薄く露出している曹達を帚木で集

めたものを用い、この地方の支配者である蒙古王は帚木一本について幾らという税を課しているらしい。鄭家屯からポリまでの間は、殆んど樹木らしいものはなく、小さい草ばかりで、たまたまあるのは柳である。それで此の精製所で使用しているものは、総て柳の枝で作る、曹達を溶かした液を汲む柄杓まで柳の枝で作つてあつた。尤も初めは漏れるが、使用するうちに曹達の結晶などが附着して柄杓の用をなすのである。大きいタンクも矢張り柳で作つてあつた。煮詰める釜は鉄製で枯草を燃料とし、煮詰つたものは、その儘冷やすので釜の形をして居り、これを二枚合せ荷造りをして、北京や牛荘に送るようであつた。私は此処で曹達露出の面積とか、地表、地下に亘る各種のサンプルを採集し、今度は専ら北に向い出發した。

タクソノールと云う所へ来ると、此処にも曹達精製所があつた。ポリ地方に比べ、ここでは低温の爲め湖水の表面に出来る曹達を掻き集めて造るのであるから前者に比べて非常に純粹である。氷の上に曹達が露出する現象に対しては、十分に研究する材料も暇もなかつたが、多分湖底から湧き出る湖水が湖面で氷結し水分は蒸発し曹達を残したものであらう。湖水の広さや深さは手を尽して測定し、濁つた湖水の水をビール瓶六本に採取し、又製造され

た曹達の見本等を貰つて再び出発したのである。

これで思つた個所を調査し終つたので農安に帰路をとる考えもあつたが、農安は東蒙古内で最も繁華な部落であるから、馬賊の危険があり、これを避けるため其処は立寄らぬ方針を立て、タクソノールから東へ東へと進んだ。進むに従つて、日一日と原野が開けてくるのを感じ、数日後の午前十時頃に至つて進路の方向に塔の様なものを望見した。詳しく観察するとどうやら水塔らしい。水塔だとすると長春の停車場であらうと一行の意気は頓に上り、全く蘇生の思いがしたのであつた。それから塔を目指して前進を続け、午後三時頃に漸く長春駅に着いた。駅の広場に馬車を引入れ、此処で護衛兵と苦力の労をねぎらつて帰えした。鄭家屯で案内者として雇つた青年は、一日か二日の約束であつたが、到々二十日間にわたり我々と行を共にした、と云うのは鄭家屯での彼等の食物は高粱や黍で、米を喰うことはなく、要するに我々の米食について来た訳であつた。殊に私が一行の大將であることを呑み込んでか、身の廻りのことにまで専ら氣を付けて奉仕した。一日二十銭の雇賃であつたので、二十日分の賃金と多分の加算を得た彼は非常に喜んだ。長春から鄭家屯までの彼の旅費は贅沢しても一円は要らないということであつた。

停車場ホテルに交渉したが、部屋がないとて受付けない。事情を詳しく話して漸く泊ることができ一風呂浴びて散髪の上、受付へ顔を出したら一笑せられた。長い間、我々は入浴もせず散髪もせず物騒な風体であつたため、宿泊客のないホテルで怪しまれて、玄關払いを喰うところであつた。一行宿泊したのは私とも四人であつたが私は戒しめて肉類其他重味のものを取らず専らオートミール其他類の軽き食物の少量で其晩と翌朝の二食をのませた。

蒙古天然曹達は、企業にならぬと私は断定し、この件では原さんと無関係になつた。東京、横浜の実業家で、この件に対し私にわざわざ面会を求めて様子を聞いた人も二、三あり、その中には鉄道敷設の計画などを相談せられた人もあつたが、私は企業には採算がとれないことを種々の事実を挙げて論じた。私の探險後、満鉄では可なり大規模の探險隊を組織して探險したことがあつた。其の双方の探險報告は残つて居る。

日本カーボン会社の設立

私は東京に居つた頃、千駄ヶ谷に住んでいた。すぐその近くに小さなカーボン会社があつて、藏前高工出身の石川等君が技師として勤めていた。私は藏前の教授であつたため懇意に往来していたのであるが、何かの理由でその会社は閉鎖せられ、石川君は浪人となり、私にカーボン製造の新会社設立について相談された。当時、新会社の設立は仲々容易でなかつたが、色々と手を尽し窮余の余り横浜の中村房次郎氏に相談した。新会社は十萬円の資本金で二萬五千円の払込みにより設立するという目算で依頼したのである。中村さんは銀行集会所での昼食後、知人五、六名を集め、これを披露して協力を求めた。ところがカーボンと云うものは一体何に使うものか、との質問が出た。中村さんも答えることが出来ず、「自分はカーボンの用途は知らない。ただこの事業を持つて来たのは、藏前高工の鈴木と云う教授で、

以前から空中窒素の關係の爲め私はこの人を信用しているばかりだ。」と云つたら、他の連中は、「自分達は鈴木と云う男は知らないが、君を信じるから、二万五千円位のものなら賛成しよう。」ということ、たわいもなく成立した。そして東神奈川の野原の中に、カーボン会社が出来上つた。それを電車や汽車の窓から見ると、丁度原っぱに風呂屋が一軒建つたという様な感じであつた。ところが創設以來、何らの蹉跌もなく順当に發展し、資本金は五十万、百万と増資されて愈々業績は上つた。丁度これは大正七年であつたので、世界大戦景氣に乗つたものである。戦後は稍々経営不振となつたが、当時横浜市電は私立の株式会社で、その支配人をしていた近藤賢二君が整理に当り、不振を克服して再び發展、終りに今日の大会社となるに至つたのである。

石川君は後に社長となつたが、石川君も近藤君も両君とも若くして他界し今やなし。而して会社は益々隆盛となつた。実に惜しむべきことである。

三菱鉛筆会社

明治三十年代の中頃に、有名な教科書事件と云うものが起り、盛岡師範学校長の高崎均君が、それに連座して校長を辞め、東京へ来て浪人し、色鉛筆の研究を始めた。そのため蔵前高工にも出入りしていたのであつたが、そのうちに高崎君は、鉛筆会社の設立を企図して私に持ち込んで来た。私はカーボン会社と同様に十萬円の資本金で、払込み二萬五千円の鉛筆会社を考え、今度は三溪先生原富太郎氏に相談した。三溪先生は、「会社の設立には賛成であるが、経営者に人を得ることが困難である。下働きは自分の方に心当りがあるが、これを総括する社長のような人を、専任でなくともよいから得たいものだ。」と語られた。そこで私は市の電車会社支配人である近藤賢二君に依頼してはどうかと提案したところ、三溪先生も近藤君さえ承諾してくれば、設立は私が引受ける、と賛成されたのであつた。或る

日、私が尾上町の停留場で電車を待つていると、支配人の近藤君が電車で通りかかったので早速呼びとめ、尾上町にあつた風月と云う菓子屋の喫茶室へ連れ込んで、鉛筆会社設立の話を持ち出し三溪先生の意を伝えた。近藤君は直ちにその場で快諾してくれた。当時近藤君が支配人をしていた電車会社の本社は、今の戸部警察署の場所にあつたので、鉛筆会社は其処から程近い国鉄神奈川駅の裏に設立せられ、大和鉛筆株式会社と命名された。近藤君は会社への出勤の暇々に、鉛筆会社に立寄つて、その経営を見てくれたのであつた。ところが鉛筆製造の技術がうまく行かず毎期赤字を出し、僅かに副業のクレヨン製造でお茶を濁す程度であつた。のみならず技師長の高崎君と、原さんの方から来た事務員と、近藤君との間の人事関係が不円滑で、私は甚だ手を焼いたのであつたが、その後高崎君と事務員は会社を去り、近藤君一人となつた。そして私の学校での助手であつた桜井三千蔵君が専ら技術面を担当したが、相変らず成功の域には達しない。そこで近藤君は種々奔走し苦心した結果、東京大井の真崎鉛筆会社と合併することとなり、新しく真崎大和鉛筆会社と云う名称で再出発したのである。桜井君は、当時の農商務省実業練習生制度の最後の留学者として、二カ年間ドイツに派遣せられた。ドイツに渡つた桜井君は、ヌルンベルグの世界的に名高いハーベルの鉛筆

会社を目指し、その従業員として入社 of 工夫をしたのであるが、技術スパイの嫌疑を受けて、或る時間内にヌルンベルグを退去するよう命じられたこともあつた。とに角、二年間をドイツに滞在して帰朝した後は、真崎大和鉛筆の技術面は非常によくなり全く面目を一新した。

社長も近藤君から、原さんとの関係の現社長、数原三郎氏に移り、戦災に遭つて大損害を蒙つたにも拘らず、今の隆盛をもたらしたのである。戦争中に台湾の新高山から木材を伐り出して海軍の用材とする際、鉛筆会社もその分配にあずかることとなつたので、台湾に分工場を設立する計画を立て、桜井君は会社より派遣されて現地に渡り、その計画を進めたのであつたが、二度目の台湾からの帰途、潜水艦に襲われて戦歿したことは、誠に遺憾な次第である。三菱鉛筆会社は今日斯業界の第一線にあり、其の製品の優秀なること万人の認むる所で、数原社長に全く負う所であると共に桜井君の不運を思わざるを得ない。

松尾 鉦 業

大正二、三年頃、中村房次郎氏から、自分の経営している松尾硫黄鉦山を見て欲しいとの依頼があつた。それは硫黄のガスを空中に散ずることから、附近の樹木、特に針葉樹を侵して枯らすために、青森の大林区署から苦情が出て、稼業差止めの恐れがあるから、何か防禦の策がないものかと云うのであつた。そこで私は、増田屋の総支配人である岡部と云う人も同行して、松尾へ行くこととした。

盛岡に一泊し、翌朝早く好摩駅に下車し、そこから人力車で大更と云う所まで行つたが、悪道路で仲々車が動かない。それで三人曳にして漸く到着したが、既に暗闇になつていた。その後、幾度も行つたが、次には馬で行き、その次はトロに乗つて行く様になり、山が盛大になるにつれて、遂には大更から松尾専用の汽車が山麓まで敷設せられ、交通は非常に便利

になった。私が初めて山に來た頃は、人口二百数十人の淋しい寒村で、附近の溪々には石楠花の木が生い茂つていたものである。その様な所であるから、会社の方にも宿舍の設備とてなく、朝の洗顔も戸外に出て、笕の水を使つたものであつた。

視察した結果、山にはこれと云う技術者が居ないことを知つたので、藏前の卒業者である林知義君を会社に推薦したのである。林君は電気科の出身であるから、私の化学教室で数ヶ月間化学の修業をなし、殊に硫黄の研究に力を注ぎ、その間一種の電気炉を使つて精煉する方法を考案し、その特許をとつて山に入つた。そして先ず小さな水力電氣を起して山に電灯をつけ、同時に硫黄ガスの被害を防ぐ種々な工夫をしたのである。しかし特許の電氣精煉法は使用しなかつた。

山は盛況の一途をたどり、学校、病院等の施設も出来て、市制を布くだけの資格になつたのであつた。ところが、昭和十四年に山は一大災害に見舞われたのである。それは、鉱内落盤事件で、百名近い従業員が死んだことである。その時、中村さんは神戸に出張中であつたが、事件の報に接するや直ちに横浜に帰り、私と共に急ぎ山に向つた。その後一カ月にして、山では盛大な慰靈祭が行われたのであつたが、その際も、中村さんの依頼により、私は

喜んで同行して参列したのである。

その跡始末については、当時の世論に何等の非難の批評もなかつた。これは、全く中村さんの人格の然らしめるところで、私も深く感動したのである。中村さんは、山の災害に際し、他の人と同行すると、非常に同情されて慰藉の言葉を聞くのが、却つて苦痛に感ぜられ、私の同行は『既往は返えらぬもの』として諦らめ、今後の計画に話の花を咲かせるので、それを楽しんだためであつた。

後年、松尾は本邦随一の硫黄鉱山となつたのは、中村さんの経営に由るものであるが、三十年間に渉る林和義君の努力尽粹は、何人も認識する所であらう。

舍密研究所

私が窒素問題で外国に行き、帰朝して未だそれが実行に移らない前に、第一次世界大戦が勃発した。そこで舍密研究所なるものを設けて化学の研究をすることとなり、中村房次郎氏が発頭人となつて、丁度その頃、豆糟会社の社長の様な仕事をしていた金慶君と云う人が、専らこの研究所の創設に力を尽されて出来上つた。

東神奈川の浦島町に設立せられ、私が所長となり、明治専門学校から、富山保君の転任を懇請して、主任として専らその経営に當つていただいた。此処では、増田屋の仕事や又一般の化学の研究をしたのである。その支持者は、中村、原の両氏であつたが、實際は専ら中村氏の出資によつて経営された。私は蔵前高等工業に勤務していたので、毎週一回は研究所に顔を出したが、内部の仕事は一切、富山君の努力に俟つたものである。富山君はその在任中

に学位論文を作った。研究所には、化学研究に必要な文献類を始め相当な設備があり、順調に業績を上げていた。大正十二年の大震災火災で横浜高工は全部焼失の損害を蒙ったが、この研究所は焼失を免れて残ったので、一時は学校の化学科の実験は、この研究所に移し授業の継続が出来たのであつて、研究所は学校に対しても、大きい貢献をしたものである。

昭和二年に財界のパニックが起つて、舎密研究所を閉鎖すると云う命令が私の所へ届き、私は少からず驚ろいたが、直ちに原さんを訪ね、原さんの出資によつて継続して貰いたいと訴えた。原さんは「この研究所は既に債権者の手にあつて如何ともすることが出来ないの
で、継続することは困難である。一万円の金を君に差上げるから、どの様にでも研究所のために使つていただき度い。」と、実に親切懇篤な答であつた。私は初めてその事情を知り、原さんからは一万円を受けずに、その儘歸つて研究所の文献の一部を私の専断で丸善に売り、さし当り所員の給料を支払うと共に、所員の一部の人を、高等工業や帝大へ転出して貰つて人員を整理し、僅かな経常費で賄う方針を立て、更に研究所の物品を売却して当分継続することとした。しかし実際は文献の一部を売つたのみで他には全く手をつけずに済んだ。

一方色々事情を探索した結果、債権者の代表者は正金銀行であることを知り、当時の頭取

りであつた鈴木島吉氏と、横浜正金支配人の五十嵐直三氏に、所謂お百度詣りをして、「研究所は、中村氏が公共の利益のため設立されたもので、私共所員は常にその心構えに従事していたのであるから、一切を挙げて無償で私に譲り渡して欲しい。」と云うことを懇願した。その結果私の願い通り正金銀行では承諾してくれたのであつた。私はこの旨を原氏に報告し、研究所の維持を懇願したので、原氏も私の申出を快諾され、その後昭和四年の閉鎖に至るまで、原さんの出資で維持せられたのである。正金から研究所の一切を無償で私は譲り受けたが、登記もせず、その儘にして置いたので、その後どうなつたものやら、さっぱり関知しないのである。

人 造 絹 糸

大正の初期には、未だ人造絹糸と云うものは、よく知られていなかった。後に日本の人造絹糸界の先駆をなした帝国人絹の前身が、米沢で久村氏により研究の途上にあつた程度である。人造絹糸は化学製品であるから、段々改良の手段が講じられ、従つて将来は生糸の大きい競争相手になると私は考えたので、学校に於ても大いに注目した。

生糸は、一つの農業製品であるとも見られ、従つてこれは原料であり、文化発達の程度からするならば、生糸は日本から支那、朝鮮へ移るべきであるとし、横浜の生糸業者の大御所である、原富太郎氏に説いて、支那の生糸に力を用い、一方人造絹糸を研究すべきであるとした。

その頃、原さんに関係のある教授橋本重隆君がドイツに留学して居つたので、原さんの依

頼を受け人造絹糸を試験的に造る機械を購入することとし、橋本君の努力でオスカ・コーホルン会社の人造絹糸製造の十鍾分を、日本に送り届けて貰った。これを富山君が東神奈川の舎密研究所で組立てて人絹を試作したのである。原さんは、これを極く秘密にして置いたのであるが、どこからとなく知れて、日本紡績の宮島氏や、原さんと懇意な一、二の人が研究所を訪れて見たのであつた。その中で三井物産の安川雄之助氏は非常に興味を感じ二度も見に来られた。これが今日の東洋レーヨンの根元をなしたと思う。その他、現在著名な倉敷ビニロン、外二、三の会社も横浜に多少の縁故があつた様に私は思うのである。又、横浜と共同で人造絹糸の会社を設立せんとして努力した泉紡績、その他の有力者もあつて、原、中村等の人と会合し相談したこともあつた。私は富山君と共に終始その間の仲介者として立つて居つたのである。

又、横浜方では、井上準之助氏（後の大蔵大臣）も万事の相談役であつたので、私はこれがため屢々、井上さんにも面会した。一日、井上邸を訪ねて相談した際、人造絹糸の企業が盛んになる傾向を見て、「横浜は多少、手遅れしたのではないか。」と云われた私は其前後の話から井上さんには人絹に就いて熱意と積極性のないことを感じ、其の最後の言葉を聞いて

私は私の説を強調せずに辞し去つた。そして横浜方の従来が行きがかりから考えて、我々の相手は、実は工業家でも事業家でもなくて、金融業者であることを知つた。金融業者を相手にしては、工業は容易でないことを、しみじみと感じ、それ以来私は、横浜の企業界から全く手を引き、学校に閉ぢこもつてしまつた。